

## 四才児

村井 トミ

昨年受け持った幼児について、「社会」の立場から書くのであるが、「社会」ということを、どの程度に考えるか、深く考えれば考えるほどむづかしく、他の保育内容よりたくさん問題を含んでいるように思われる。幼稚園での「社会」に関するものは幼児の生活全体に流れ、ここからこままでが「社会」といって切り離せないのである。

そこで、ここでは、ごく平凡に、幼稚園での、四才児としての、個人的及び社会的な生活習慣、生活態度の点にしぼって、ふり返ってみよう。

ちょうど今から一年前のこの頃、私は、既に一年間 楽しく三才児の生活をしてきた十

五名の幼児と共に、新入園児三〇名を迎えた。あわせて三十五名、男女の数は、ほぼ同数であった。

例外なく、そこには、いろいろの幼児の姿があった。ひよこのように親鳥の羽の下を離れぬ子、おどおどしている子、あそびに入らぬ子、わけもなく、いたずらや、いじわるをする子、べたべたと先生につきまどう子、口から生れたかと思うほど、おしゃべりな子、一時も落ち着いてられない子など……

幸なことに、親の方が、むしろ子どもに離れにくいという難問も、入園当日の話を、保護者がよく理解してくれてか、案外スムーズにいった。

もう一つは新旧の幼児関係である。旧園児が優越感をもったり、新入園児が劣等感をもったり、または反対に教師が新入の幼児に手いっぱいの為に、旧園児が何となく淋しげに、ほんやりとしてしまうというのではないように気をくばった。旧園児には、私の手つだいをよくしてもらい、勝手なれぬ新入の友だちとあそんだり、手洗へ連れていってもらったりした。新旧へだてなくということは、保護者にも、おおいに関係があると思ひ、三月中



入園当時　こぶがたくさんついて先生も重いこと重いこと

に前もって話をし、協力してもらうことを依頼した。

新入園の方が人数が多いということも、この場合にはよかつたかもしれない。

(一)

新入児をかかえては、先ず幼稚園になれることである。個人個人の家庭から集団の中へ

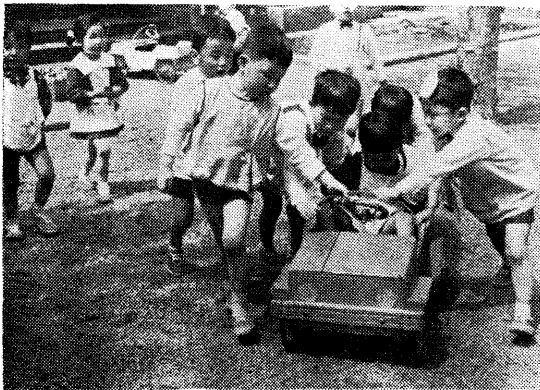
はじめで入るのであるから、子どもにしてもこれはさぞたいへんなことだろうと、半ば同情もした。それにしても、いかに幼稚園が楽しい所であるかを知らせるという一仕事があり、こちらも懸命であった。そして次のような、一学期に私のしたいこと、「ねらい」と言うよりも、「願い」というようなことを、自分にも言いきかせ、保護者にも話したことだった。

- ・幼稚園になれ、幼稚園を楽しい所だということを知る
- ・幼稚園へ来て、いろいろのことをして、あそべるようになる
- ・次第に友だちと一しょにすることが楽しくなる
- ・旧園児は新園児を、やさしく教えてあげたり、仲よくしてあげる
- ・自分でできる程度のこととは、なるべく一人でする
- ・みんなで決めた約束は守ろうとする
- ・思ったことを、素直に言える

幼稚園の生活に、よろこびを持たせる為にも、いろいろの遊びを知らせる為にも、友だ

ちと一しょということにも、思ったことを素直に言える為にも、先生としての大きな役目である雰囲気の問題がある。教師自身の明るさ、ついつりこまれるような楽しげな生き生きとした雰囲気は、子どもの心にも響かすにはないだろうか。いつもそうであるが、特に一学期は、子どもの上に立っての指導でなく、一しょに、充分にあそんであげる、この辺に先ず第一の秘訣があるのではないかと思う。これは口で言えば簡単であるが、実際には、なかなか難しいことである。外へ一歩も出ない子もある。あそべない子の好きそうなあそびを早く見つけ出し、それをきっかけとして発展させていくのも、一方法であらうし、一工夫のいるところである。

こうしていろいろの遊びを経験していく中でよく子どもの状態を観察し、友だちづくりに精を出さなくてはならない。もちろん、教師の工夫や、機智、ユーモアなども当然必要となってくる。この頃の記録をたぐって見ると、四、五月の友達関係のおもしろいことに気づく。やっと教師の袖を離れて、うまく一日中遊んでいる、と、そうっと大切に見守っている、それは一日だけであったり、二、



一台しかない自動車　かわり番にのりましょ　はい発車

三日で終ったりしてがっかりさせられる。しかしまた他の友だちと同様なことを繰り返している。昔から「猫の眼のように変る」ということばがあるが、全くこのことである。或る時は一つの遊びがきっかけとなって成功し（自動車とか、まりつき、虫きがしなど）或る時は家が同方向であったり同じ電車であったり、また或る時は偶然隣に座ったかなど、ちょっとしたきっかけでうまくいく

時もある。この時の仲よし、ずっと小学校、中学校まで続くこともあるし、一年の中でも、何度となく変わるものもある。三人の場合、一日の中でも必ずその中の誰かが、のけ者にされ、そののけ者にされる子も決まった子でないというのも、おもしろいことである。

このようにして次第に、先生にくっついての一人あそびから、二人あそび、四、五人と次第にグループ内の人数が増えていく。そして一学期末頃では小さいグループが、あちらこちらに見られてきた。おもしろいことに一学期では、男児も、ままごとにくっさん参加していることで、時には男児だけできている光景の見えるのも、この頃特有のものである。

みんなで決めた約束を守るという点では、「玩具の独占をしない」、「友だちと仲よくする」、「順番が待てる」、「物を大切に使う」、「あそんだ後や仕事のあとかたづけをする」。この程度の事を毎日根気よく、一つ一つ具体的に、個人的に、または全体的に指導してきた。もちろんはじめは、手を洗うにも並ぶことも、順番を待つこともできないし、大きい

な事に泣いたり、泣かせたりであったが、日を追って、一步一步前進してきた。

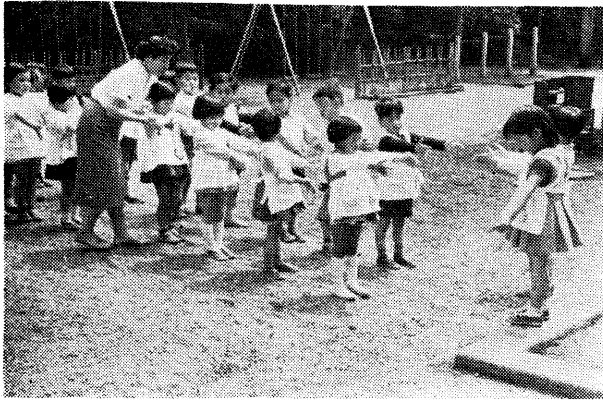
病気で長休みした幼児が、入園当時のふり出しに戻ってやり直しのようなきことはあったし、いたずら坊やや、くっつき虫も何人もいたし、完全にはまだまだ仲間に入れないと言う子もいるが、一学期の生活で、皆幼稚園でのしみに過したようであった。

## (II)

やっとなれたところ  
で長い夏休み、一学期の苦心も水の泡かと思いつつ迎えた二学期だったが、案外好調にすべり出し、特殊な子ども次第に普通になってき



6・7人のグループでこんなにお山ができました



た。ただ、はじめの中は全体に目立って落ちつき  
のなきを感じた。約束したり、注意したり  
することも、すぐ傍から消えていく感があっ  
た。「ぬかに釘」のことわざを思い出したり  
した。そこで二期の私の「願い」も次のよ  
うなことになった。

・友だちと仲よくあそぶ

・人の話を心からよく聞けるようになる  
・何でも一生懸命やろうとする

みんなで決めた約束を守ることなど、その  
他一学期の経験のつみ重なりは、はぶくこと  
にして、私はこの三つを二期の主眼として  
生活しようとした。

男の子たちは組に六つ位しかいないバトミン  
トンの獲得が英雄のようであり、お弁当の時  
も、そつとどこかへかくしたり、ズボンの下  
にしのばせたりしているし、女の子は目立っ  
て口げんかが多くなった。原因は玩具を分け  
てくれないこと、なりたいたい役にしてくれない  
ことがトップであった。一見困ったことだと思  
ったがよく考えてみると、これも自己の主  
張がはつきりと言えるようになった一つの進  
歩であり、発展の経路にちがいないと思うと  
嬉しくもあった。一学期には無事平穏であっ  
た、ままごとにしても、一つの強力な権力の  
下にと言うより、まだ一人ひとりが、自己の  
主張を口をとがらせて言えるような段階に到  
っていないからなのであろう。そこで思いき  
つてゴザやままごと道具をふんばつして用意し  
た。これはよい結果だった。

また、実によくおしゃべりするようにな

った。つきるところを知らずである。これ  
も、うれしい悲鳴であった。

二期の末には同じままごとでも幾軒にも  
分れてそれぞれ工夫して世帯をひろげるよう  
になってきた。男の子たちはリレーに凝りだ  
した。あきらかに競争的なあそびを好むあら  
われであらう。明けても暮れても、バトンを  
手にして、よくも飽きないと感心する位だ。

「花いちもんめ」「あぶくたつた」「たけ  
のこ一本おくれ」「ひっぱりっこ」などもこ  
の頃、男女を問わずに、「入れてー」と飛ん  
でくる好きなあそびであり、相当の人数でよ  
くあそんでいた。

### (Ⅲ)

お正月を過ぎての三期の「願い」は、次  
のようなことにした。

・誰・でも・仲よくあそぶ  
・いろいろなことを工夫する  
・何でも積極的にしようとする

三学期末よりのリレーは相変らず夢中であ  
り、人数も多くなった。警察ごっこのような  
ことも、まりぶつけなどのようなことも、時  
には男の子全体位でやっていることも見られ  
た。実によく遊ぶようになってきた。かえつ



て女の子の方が、まだ友だちをより好みの傾向が多分に残っているようだ。

何でも工夫するということは、製作や音楽リズムを創造的にすることばかりでなく、生活の中でぶつかる事ごとに対処するにも、適切な判断や理解のできない子であっても、困るという考えである。もちろんあそびの

中にも工夫が大いに必要であろう。

積極的ということとは、経験して自信のあることはよいが、未経験のことは臆病で一歩も前進しないという子が、まだまだいるということによってであった。

気の弱い子どもには何といってもどこかを認めて自信をつけてあげることが一番近道の

ようである。或る一つの自信から次の自信を生むことになる。先生の手伝をしたり、友だちの世話をするお当番も三学期から本格的にやり出した。大好きなお当番、これも自信をつける一助になるかも知れない。

大きな眼で見ても、この頃はさすがに、自分のことは、この年令なりに処理しようとするし、かたづけもよく協力してやってくれる。

成長したなあとと思う。三学期も終る頃には、年長組の受けもつ「ひなまつり」や、一人ひとり証書をもらう卒業式などを見て、もうすぐ幼稚園の年長組になるのだという自覚と希望が大分出てきたようで、張り切っている様子が見えた。

四月には皆、顔を輝かせて、年長組の部屋へやって来ることだろう。

これからの玩具の取りっこや、けんかも、まだまだ続いて起ることであろう。また、大きくなったなあと、喜びに顔を輝かすこともたくさんあるだろう。

先生も子どもと共に一つ成長して、張り切って踏み出さなければ、いや、踏み出そうと新学期を前にして、私は今、胸いっぱい空気を吸いこんだ。



## 守 永 英 子

四才児とともに過したこの一年間に「社会」の領域をどのように扱ってきたであろうか。元来、幼児の生活は未分化なもので、六領域も、互に独立分化したものではないといわれるが、殊に「社会」については、その感じがつよく、むしろ生活全体に網の目のように入りこみ、からんでいるように思える。この一年をふりかえっても、「社会」に関して何をしたかをとりたてていうことはむずかしい。しかし、この一年間に最も心をくだいたのは「社会」に関したことがらであったかもしれない。どうしたら、幼稚園の生活に、はやくなれるだろうか。お友だちと仲よく遊べるようになってきただろうか。自分を出しきって遊んでいるだろうか。いろいろなことに興味をもって、いきいきと活動しているだろうか。年令相応に、集団生活のルールが身に

ついてきているだろうかなど。今もなおつきない問題の中にあつて、どのように、この一年を過してきたかをふりかえってみる。

### ◎ 入園当初

入園当初の子どものようすは全くさまである。朝、登園するとすぐにお庭にとびだす元気な子ども。お友だちに働きかけて遊ぼうとする社交的な子ども。誘われればついていくおとなしい子ども。ひとりで絵本をみたり、汽車を動かしたりすることも。何もせずじっとしている子ども。中には附添から離れにくい子どももいる。早速、胸のうちで大体の鳥瞰図を作らなければならない。家で遊びなれているようなもの、ひとりでも遊べるようなものを中心してえらんだ玩具を、遊びかけのように用意して子どもたちの登園を待つ。次々に現われる子どもたちには、「おはよう」と声をかけながら、この子どもは、このまますぐに遊びにはいれるだろうか、どうやって入れようかと考える。遊具に誘われてすぐに遊びにはいる子どももある。ままごとの好きそうな女児には、「お人形さんや熊さんがおなががすいたんですつて。朝

ごはんあげてくださる？」とままごとコーナーに誘ってみる。遊びにはいるきつかけをつかめない男児は、いっしょに汽車を走らせたリ、積木でトンネルを作りながら、「あら、ここどうしようかしら？」などと相談をもちかけると、「こうするんだよ。簡単だよ」と自信をみせはじめ。附添から離れにくい子どもや何もしない子どもは、絵本をよんであげたり、卓上積木をつんで「もっと高くつめるかしら」と手伝ってもらったり、それがガラガラとくずれた時にいっしょに緊張をほぐれたりする。新しい環境を一通り知ること必要であるから大体全員が登園したら、室内で遊んでいる子どもを誘ってお庭に出る。お庭をぐるっと一まわりしてみるが、まだ不安気な子どもたちに一番人気のあるのは、お山から草をつんできてモルモットやにわとりにたべさせること。くり返しくり返しくり返して続ける子どももある。この簡単なくり返しのおそびも、「いっしょに摘んでいらっしやい」とお友だちと手をつながせると、それがきつかけで仲よしになったものもあつた。幼稚園の中で遊ぶこと、これだけはしっかり約束したが、この制約の中では、子どもた



ちは、幼稚園とは自由に楽しく遊ぶところだ  
ということが次第に分ってきたようだった。

◎ 自由遊びの中へ

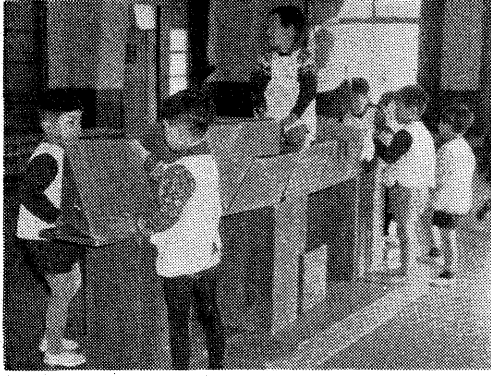
子どもたちが新しい環境の中で安心して羽  
をのばすようになってくると、危険な場所でも  
みられるようになってくる。危険な場所での  
遊び、遊具の危険な使い方は注意しなければ

ならないが、のびし始めた羽を縮めてしまわ  
ないように、その仕方に気を使う。軽い注意を  
軽く受け入れてくれる場合もあるし、間接的  
な誘導で遊びの方向を転換させて、やっとで  
きかかった親和関係を傷つけずにその場を脱  
することもある。

まだ充分安定感がなく消極的な子どもは、  
自由な遊びよりも紙芝居などを喜ぶ。入園当  
初から、受容遊び（紙芝居、テレビなど）を  
主として、学級全体が集ってする活動もとり  
入れてきたが、この時期には、集団行動より  
も自由遊びの中で、自発的に、自分を打ち込  
んで遊べるようになることをねらった。消極  
的な子どもをしむけるためには、教師は積極  
的に話しかけたり、いっしょになって遊んだ  
り、お友だちに誘いかけてもらったりした。  
彼らがそろそろと自分を出しかけた時には、  
その遊びが妨げられることがないように守っ  
てあげることも必要だった。

少しなれてくると、子ども同志の接触を刺  
激するような遊具、遊び、助言が必要にな  
る。「かごめかごめ」「おにごっこ」などの  
集団あそびやままごと、乗物玩具、縄電車な  
どが効果的に使われる。「どなたかお乗りの

お客様はありませんか」と誘ったり、教師も  
お客様になって、ままごとの家をたずねたり  
する。自分からも、「入れて」「のせて」など  
が言えるように「きつと入れてくれるわ」と励  
ましながら、働きかけが成功するように結果  
を見守ってあげたり、ことばをそえてあげた  
りした。砂場なども、「大きなお山をつくりま  
しょうか。手伝ってちょうだい」などと誘い  
かけて、ひとりではとてもできないような大  
きな山をつくったり、川や橋やダムに発展さ  
せたりする。お友だちといっしょにするおも  
しろさを経験することが協力の気持を芽ばえ  
させる助けとなることを願いながら。こうし  
て、教師の媒介や遊具、遊びを手がかりにし  
て、子ども同志の触れあいが多くなり、次第  
にいっしょに遊べるようになるが、交渉の技  
術の未熟さからトラブルも多い。「Aちゃん  
がぶつんだよ」というBの訴えに、「どうし  
たの」とAにきくと、「僕のシャベルをとっ  
た」という。Bの意外そうな顔を見ると、ど  
うもAの使いかけのシャベルを、Bがそれと  
知らずに使ったらしい。「向うの箱にまだあ  
るわ」とBに取りに行かせて、「Bちゃん間  
違っちゃったのね。怒らないで『それ僕の』



つていえばよかったわね」とAにいうと、Aも少し落ちついてきて頷く。戻ってきたBに「『これAちゃんの？』」つてきいてみればよかったわね」というと、Bもシャベルを手に入れて気持がおさまり素直に受け入れる。また、積木の場面では、せっかく作った舟をこわされたといつて怒っているC、言われて困っているD。Dが誤ってくずしたことをDに説明し、Dに謝ることをすすめる。Dといつしよにこわれたところをなおしてやり「Dち

ゃんがなおしてくださいだったから『ありがと』」つていいますわね」と促す。このような時、Dがすぐに「ごめん」と言えれば、Dもそんなに怒らなかつたのではなからうか。このようなコミュニケーションの不足から起るトラブルも多かつたが、子どもたちの成長は、「これ君の？」「うん、でも貸してあげる」「こわしていやだな」「ごめんごめん」という形に次第に変わっていった。子どもたちの成長ぶりは、真っ直な階段を登るようなわけにはいかなかつたが、それでもこの一年の終り頃には、数人から、或る時は十数人ものグループを作つて、仲よく遊べるようになった。砂場のダム工事や、積木の滑り台や城塞つくり、ままごと、リレーやラケットでボールを打ち合う簡単なゲームなど。「こうしようよ」「うん、そうだね」と子どもたちの関係もかなりスムーズに、遊びも創意工夫を生かして進展する和やかな一日に、「今日は開店休業ね」と微笑ましく思う日が多くなつた。電蓄を使うことを覚えた女兒が二、三人「びーぶるびいぶう風がふく……」と大すきなレコードをかけながら、まわりに集つた数人の子どもにその絵本をみせてあげている様子、

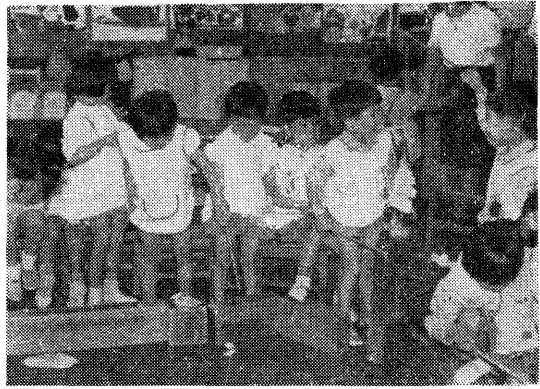
夢中で見ている子ども……本当にかわいなと思う。一、二度教えてあげた電蓄のあとしまつもきちんとしてくれるようになったのは驚いたが、こうして自分でできることが多くなることは、子どもたちが自由にふるまえる領域が広がることだとしみじみ思った。

#### ◎ 絵画製作の中で

秋の運動会もすぎた二、三日後、私は黒板に紅葉の葉を一枚かいた。「先生、何してるの？」「この間の運動会のおゆうぎに紅葉がでてきたでしょ」「ああ運動会の絵？ 私もかいていい？」だんだんと人数がふえて%ほどがわかるがわる参加。「りすもあつたわよ」「ことりも」「きのこも」色とりどりのチョークで黒板は「秋のお山のお友だち」でいっぱいになった。

また、お友だちと二人で一枚の画用紙に運動会の絵をかかせてみた。「いっしょにかかない」と誘つて二人組をつくること、「何してるここかく？」と相談すること、そして、かいている間の話合いなどがスムーズに行なわれて、子どもたちの成長が感じられた。ふだんあまり協調的でないYも、教師の助言で相





手を見つけると、あとは二人で嬉しそうに、「玉入れ」の絵をかいていた。

秋頃から、子どもたちは空箱を使って製作することに興味をもちはじめ、雨の日や、外あそびにあきると、いろいろなものを作った。いつも変ったものをつくるM子が洋風の家をつくってきて、「先生、あとどうしようか」という。子どもたちに「どうしようか」と言われる時、私はたいてい「そうね、どう

したらいいかしら」と受けることにしている。そのあと子どもが自分で考えて意見を出してくれることが多いから。しかし今日は、M子も同じことばをくり返すばかり。よい考えが浮かばないらしい。そばに独立独歩型のYがポツンと一人でM子と私をみている。「Yちゃん、どうしたらいいと思う？」Yは製作が好きなので興味をみせ、結局、M子が屋上にフールをつくり、フールに上る階段の上にYが望遠鏡を作って、デラックスな家ができた。TとNは二人で電車を作り、Nが家に持って帰るといっているので「Tちゃんと相談してね」というと、「僕ジャンケンで勝ったの」とすましていた。この程度の問題は私の手待つまでもなく解決できるようになっていたののである。

### ◎ ゲームやごっこあそびの中で

運動会の前後、五才児に刺激されてリレーがさかんになった。といっても、まだグループの勝敗を競うのではなく、二列に並んで自分と対応した相手との個人競争である。それでも自分たちのルールがあるらしく、それを破るものは批難された。集団生活には、

きまりをまもることが必要で、こうしたルールのある遊びは、その態度を育てるよい機会となる。いすとりや、宝さがし、じゃんけん汽車などをして、ルールを守って遊ぶ経験をさせた。普段使っている遊具からゲームを考えてもらったところ、ラケットにボールをのせて大積木をまわってくるのがいいということになった。しかしボールはころがるのでむずかしすぎるのが分り、布の玉がいいと修正案が出された。まだ団体競技のおもしろさよりも、個人的な勝敗に関心が強いが、ルールに従って遊ぶことのおもしろさは次第に分ってきたようであった。

自由あそびの中にもごっこ遊びはみられるが、学級全体で参加するごっこ遊びには、かなりきまりをまもることが要求される。一学期の終り頃、魚つりをして遊んだ時には、積木の池の囲いがこわれても、かまわず中にはいて夢中で魚をつる子どもも大分あったが、十二月末の玩具やさんごっこでは、工夫して作ったたくさんの玩具を、園全体の子どもたちに立派に売りさばくところまで成長した。

◎ 当 番

自分のことだけで精一ばいだった子どもたちも、生活になれてくると、教師の仕事を手伝いたがるようになった。おべんとうの時のおぼんくばりなど希望者が殺到して取り合うほどなので、そういう気持を満たすと同時に、ひとりひとりにリーダーシップをとる機会を与えたり、自律的な気持を育てるために当番をおくことにした。当番の仕事は、主に遊びや仕事のあとかたづけ、食事前の用意とやかんの後始末、並ぶ時の先頭にもなり、組全体への連絡係や、その他必要に応じて教師の助手になったり代りになったりする。お当番のしるしのリボンはみんな一様に嬉しいらしいが、意識の点では個人差が大きい。先頭に並ぶ特権が主となる子どももあるし、当番の責任を全うしようという意気込の子どももあるが、概して、何かおとなになったような喜びで仕事を手伝う。当番であるのに遊具をかたづけなかつたり、けんかをしたりする子どもに対するみんなの批判は手きびしく、「お当番さんなのに……」といわれて自覚を促される。

×——×——×

思いつくままにあげてみたが、他の領域の中で、また行事的な活動の中で養われるものも多い。あげればきりがなく、まとまりがつけにくい。他の領域のように、とくに、この遊びで、この仕事でというようなものでなく、生活のどの場面でも、あらゆる機会を捉えて育て養わなければならないからである。

触れ残した重要なことの中に、個人差の問題がある。組全体をみると順調な成長を示しているも、個々の子どもの問題に立ちかえった時、問題を藏したままで幼稚園期を過していく子どももある。成長と共に消える問題か否かも見極められずに。

「社会」についてこれから研究しなければならぬことは多い。しかし、「幼児」についての研究から更に一步進んで、「それぞれに違ったそれぞれの幼児ひとりひとり」が、充分に力を発揮できるようにまで内容方法を研究していかなければならないと思う。

× × ×

五才児

村 田 修 子

「社会」は他の五つの領域のどれにも密接な関係があるので、これを中心にしてとると、その広範囲なものの中からどの部面を、どのように取り上げたらよいか、ということが案外つかみにくい。社会生活をするのに必要な、基本的な生活習慣といったような、一つ一つ分けられたはっきりとした具体的な内容もあるし、集団の中で協力したり自分を主張して社会生活を営んでいく為に必要な「言語」に含まれる事柄もやはり「社会」につながっている。このように考えていけば、絵をかくことも歌をうたうことも、すべてがつかみどころのないむずかしきを感じる。そこで、私の分担は五才児であるから、その